

漂雲第9号掲載 「山小屋建設」

岩本（旧姓 内藤）文隆（S40年卒）

二年余りの東京生活から転勤で大阪に舞い戻り、久し振りに山小屋の雰囲気  
を味わいました。

前後して漂雲№8を受け取り、山小屋5周年記念が催されるとかで、本当に結構  
で嬉しいことであり、心待ちの状態です。（手紙の）文中にこれを記念して山  
小屋建設の雑文の投稿との事で、今更4年前の思い出を文章で描き出すのは記  
憶も薄れ、文章も不得手であり、多少懐古趣味とも取れます故、まあ不確かな  
記憶ではあるが精一杯の記憶と調査を基に、我が立命館大学の山小屋がいかな  
る形でもって建設されて行ったのかの経過と、当時従事した1人として面白い  
話や、失敗談等述べたく筆を執った次第です。

また、先年東京農大wvが起こした狂犬的行動を代表する最近の（大学wvの）  
ユニフォームグループが幅をきかすwv活動が、個人を黙殺して絶対服従の思考  
と、規格された人間を製造していく風潮の中で、立命大wvが創立当初の意義を  
如何に捉え、発展させて行くか。端的に言えば当初の精神とwv活動の本質をど  
の様な活動の中で守って行くのか。現実の活動において、個人の自主的精神の  
疑問等種々の問題に直面されている現役の方々に、我々OBが論理的に述べて  
も、実感は溢れて来そうにもないし、多少の時代のズレもあると思います。

そこで、モデルとして現役の人が日常使用している山小屋が建設された課程  
を述べ、その経過の中で、我々wvのOB達が現役として活動していく中で、同じ  
苦悩と闘いながら“強制”と言う無言の圧力に対して如何に論議し、克服して、  
強制手段を用いることなくあの小屋を建てて行ったかを、目と耳で感じ取って  
もらいたく、まずい文ではありますが書いた理由です。

ただ私が強制と言う言葉を嫌うのは、クラブに対して義務と責任を果たした  
人に適用されるのであり、無責任野郎には議論の余地はありません。それか  
ら、とにかく山小屋建設開始から5年余りが経っており、記憶も薄れ、メモと  
言っても当時の簡単な山日記と漂雲が参考資料で多少の記憶誤りの節はお許し  
ください。（以下、敬称略）

山小屋が欲しい。たとえ掘っ立て小屋でも良い。俺たちがこの腕で建て、住  
んでみたい。議論白熱、総会で、部室で、クラブ創立以来言い伝えられてきた  
言葉であるが、何せ小人数、おまけにクラブはテントも満足に買えず、河原町  
小西でアメ中のテントを買うのが精一杯で、メンバーの服を見ても、乞食より  
一步文化的位で、革靴を持っている者もごく僅か、地下足袋が主力の状態であ

り、時代が時代でも、結構楽しく、北山を主力に、沢歩きやピーク荒らしが盛んで、こんな状態が昭和35年頃まで続いていたらしい。

昭和35年度には新入部員がまとまって多数入部し、資金的にも、装備面でも一応充実し、全日本wv大会や在京合ワンにも積極的に参加し、36年度は新入部員百余名の盛況で、ここに至り、またまた山小屋建設が白熱化して、それに輪をかけたのが京大wvの比良の小屋建設であった。京大wvが自力で建てたことは、我々と同じシステムをとっている以上不可能ではないとの結論に達し、資金的にも余裕がありとの事で、昭和36年夏合宿終了後、仮小屋でもいいから、自分たちで自主的に建設に参加することで、粗末な木造小屋を建てることに決定、リーダー会の下に委員会が置かれ、第一段階として候補地探しとなった。確か当初予算は14万円だったと思う。

建設地はOB・現役が中心となり、北山を中心に、各山岳会に相談したり、OBが北山に詳しい故、積雪期に入る前に何回となく調査が行われ、永辻氏や大野氏が中心となってやっと決まったのが36年暮れであり、二ノ谷の出合から奥に入った現在の地点である。

基礎の設計は土木科の者が中心となり、山小屋本体の設計は、木村氏のお姉さんが積雪期を考慮して設計され、ここに青写真も出来て、着工の運びとなった次第です。しかし北山は、冬は積雪で施工は不可能で、雪解け待ちであった。明けて、37年旧人合宿終了後、会員はリーダー会より山小屋建設に参加されたくの葉書を受け取り、各自スケジュールを合わせての自主参加で、苦難の一年間がスタートしたのである。

付近は根雪が少し残っていた。現在の二ノ谷から少し入った所に炭焼き小屋があり、そこにベースキャンプ（飯場）を設けて最初の地均しにかかった。一面の笹藪とブナ林の斜面で、おまけにひどい岩盤が現れ、ツルハシも効かず、道具は鎌とノコギリ、ツルハシ、ワイヤーロープ等で、鎌で笹を刈り取り、ブナの木を根を掘りだし、ワイヤーロープで引っ張って倒し、それから掘削するという原始的な方法で地均しをするのだが、何せ道具が不足しており、また、基礎をコンクリートで固めるためには、深さ50cmの溝を縁に沿って掘らねばならず、この段階に来るまでに2か月ほどかかっている。何せ根気のいる仕事で、強制的に人数を動員することは絶対に禁止していた故、行程通り進まず、部員の中には本当に可能だろうかの疑問が、基礎の段階から出てきたことも確かであった。そうこうする内に、ブロック、鉄筋、砂利や砂が、芹生の里にトラックで運ばれ、これを小屋まで運ばねばならず、人間が背負って、芹生から小屋まで運搬する問題が緊急の課題として持ち上がってきた。

何せ、人間の背負える量は僅かで、資材の量はブロック500余個、セメント

10余袋、砂利、砂が各2トン以上はあったと思う。袋入りセメントは材質上分解はできず、1袋が50kgで、芹生から小屋までの運搬は、苦汗の連続であり、砂、砂利をザックやテント袋に入れて往復する肉体的な苦痛は、今思い出しても、どうしてあのようなことが可能だったか解せません。各々卒業して山小屋に来た時、同感だったと思います。ましてブロックは最も運搬が困難で、芹生部落の前田さんより藁の背負子を買ひ、また、木製の背負子を手先の器用な連中が制作して、実際に多く使われた。このブロックは一つ約3貫半程あったようだが、最高一度に5個運んだのが記録されており、当時3回生で土木科の“大鵬”と言われた人が、自称米俵を2個担げるから、もっと担げる背負子に余裕がなくてあきらめたエピソードがありました。

何せ量でこなす必要があり、土・日曜日とテント村に出張すると大抵朝食前に一回ボッカをやり、午前中に2回、午後は1、2回のノルマで、延べ何百人が建設に従事したか正確に記録していけば、今後の参考になったことと思います。但し、人夫賃は口八でした。当時強制を嫌う基本的態度は崩れることなく、新入生は歓迎で、新部員を使って芹生から小屋まで鉄筋を運ばすことで大議論となり、結局手に持てる程度にボッカするのも、クラブの空気に慣れるのに都合良いとの結論で、実行させたくらいであった。

工事行程中、土木科等理工学部の諸々人は、技師の風情で、本校の連中は土方諸士、ボッカ以外能はないから文句も言えず、技師さん方にとっては従順な土方だったことと思う。力の弱い土方連中にとって、土木工事は苦労の連続で、高木氏は“俺らも男”でセメント1袋を休むこと10数回、芹生より小屋まで顔を真っ赤にして頑張り、50kgに挑戦して達成した人で、最後のもうちょい坂の関門も突破、あとで聞くと、着いて荷を下した時は、腰が浮いてフワフワして宙に浮いている感じだったとか。とにかく工程の進捗はこのボッカに全てが集中しており、工事前半のウイークポイントであった。

これは私事で恐縮だが、このボッカの最盛期の頃、不注意により火災が起き、今でもその場面を思い出させる程生々しい記憶がある。土曜日に飯場に出張して何日間だったか忘れたが、確か、ブロック積の中間くらいの頃、飯場には30人程が肉体労働に疲れてグッタリ、小生のテントも7人がグッスリ眠っていた。今もって不思議なのは、あれだけ疲れていたのに、真夜中に急に眼が覚め、缶詰の缶で作った口ウソク立ての淡青な炎が真っ直ぐにスーッと延び、パッ！と一瞬テントに燃え移った時のあの炎の色と花火の恐怖は、今もって忘れることが出来ず、自分自身何とも言えぬ奇声を上げてうろたえ、突然にシラフのチャックを外し、掛けてあったタオルでもって必死にテントの天井を叩いたりして、テントを倒したことは記憶にあります。当夜（寝入る前）、火を囲んで雑談していた連中は、奇声で火事と気づき、水をぶっかけテント村は大変

な騒ぎで、火の元のテントの住人である我々7人は、ケガこそなかったが、面を上げることが出来ず、先輩には怒られるや、ボロクソに言われて、おまけに総会にて全員謝罪、テントは修理に出して、全員で負担の結論でした。実際、テントとロウソク立ての間は、間隔は十分あったつもりであったが、テントにはパラフィンが防水の目的で塗ってあり、熱せられた空気の関係で、そのような不注意なことが起こったのであると思う。

当時リーダー会で参加していた人たちの中には、山火事が起き、これで山小屋も万事休すと思った方々もおられ、我々は今もって後悔している次第です。夏休みの合宿予備訓練として、この頃基礎の段階も終わり、外郭たるブロック積みが始まり、ブロックは芹生から殆どボッカされており、それこそ手作業でのブロック積工事である。目測とカン以外は原始的な糸を使ったくらいで、垂直儀も使わず、高くなるにつれ、外に外れたり、内に入ったりで、現在でもその跡はT氏が監督の小屋の入口の付近のソリ具合は、当時も苦心の作品である。でも、結構技術者が良かったのか、なかなか立派な出来栄で、ようやくここに至り、小屋の外容らしき姿が現れだした。

人間ここまで来ると安心感と一種の挫折感の中ダルミの状態、参加者が少なくなり、総会で何回となく論議し合ったが、小屋の初期からズーと土・日曜日と、毎週参加していた人も多かった。野田氏などは殆ど日参されたと思う。氏の山日記を調べたら、当時の模様がどうだったかハッキリするが、野田氏の姿は何時も見られました。前期試験も終わり工事も急ピッチ、何せ肉体労働故、苦痛を和らげるためには、一般の土方と同様、酒、女、バクチと言いたいところだが、学生の身分ではバクチの金は無し、女には乞食人種には縁はなく、落ち着くところは澄み切った空に輝く星の光と二級酒が唯一の友達。良く飲んだり飲んだり、酔いに任せてロマンス話にうつつを抜かし、ワイ歌と蛮声をもって青春を謳歌した山小屋土方人生でした。こちらは日本酒には勿論、アルコール類には弱く、口にするのがやっとなで、酒盛りの宴もクライマックス、各々酩酊した頃には酒が不足して、飲めない小生は泥酔者に酒買いに行かされ、花背や芹生にナップザックを背負って真っ暗な山道をテクテク。帰ってみれば、張本人は酔ってテントから頭を出してグウグウか大トラ組、売ってなかったと誤魔化しても聞いてくれぬ連中ばかり、でも結構楽しいことばかりで小屋の裏には一升瓶とビール瓶の山で、空瓶を背負って空瓶代で酒を買い込んだ連中がいたとか。

小屋のブロック積も終わり、いよいよ最終段階の大工工事が始まり、これがまた花背のスキー場より材木の運搬が大変なこと、小屋の中心柱となる梁二本の長くて、重いボッカをどうするか。大勢でもって担いでも、山道故足場が悪く、結局二本の梁は、二人グループで何回となく休みながら、やっとなでこさ運

び上げたが、運搬人の肩にアザが出来て大変だった。

技術的に一番難しかったのは、屋根とブロックの接点の部分で、特に梁のコンクリートの三角の型枠を四隅に作ることであったが、本職の大工を三人山に連れてきて、松井、河原両氏の指導の下、理工学部の連中でもって見事に難関を突破、今小屋に入って四隅を見れば、当時の技術のスバラシさが立証されている。また、屋根も出来上がり、側面の壁塗り（セメントのモルタル塗り）は、実際本職以上で、実に見事、確か赤沢、植村両氏の健闘の作で、結構最高学府を出ずとも左官職でメシが食えたと思います。

窓枠とブロックの間の際間にモルタルを流し込む簡単な作業が我々の土方の仕事でしたが、細いコテがほとんどなく、結局指でもってモルタルを流し込んでセメント塗りをしていました。当時の指の跡がアッチコッチに残っています。内部木工工事は本職の大工さんに任せる他なく、土間のコンクリート打ちも終わり、屋根の赤いペンキの塗装は米田氏が本職でもって指揮に当たられ、見事な調和を保ちながら、北山の青さの中にマッチした色合いを映し、ここに我が立命館大学wvの山小屋は、何百人かの血と汗の結晶でもって完成したのである。丁度北山には夕刻の寒さの中チラリチラリと小雪が落ちてくる初冬であった。

総工費五十余万円、当初の十四万円は工程中にアレヨアレヨと膨れ上がりましたが、結局予算の面では大工工事代（代金の一部10万円）の借金だけが残りました。落成式の日、木の香りも新しい小屋の中でOBの諸氏、芹生の前田さん、現役の連中等々、苦難の一年に話が弾み、鹿の鳴き声を聞きながら、鈴木氏が間に合わせるように、夜道を突いて持参の、末川総長先生に書いていただいた額を背に、議論白熱、各自思い思いの感懐にふけり、結論としては、我々には強制されたこともないし、カネの価値では計ることが出来ぬ何物かを得たということであった。

確かに、この一年間を振り返るに、幾度かの声が聞かれた程工程も遅れ、参加人員も少ない時が何度かあったし、それに伴う挫折感が起きて、目的に対する実現の可能性も疑った。実際、強制的に参加せよの態度（対応？）をとれば、簡単にことは解決するかもしれないが、その後はお決まりのコースに乗るのは必至である。

でも我々wv会員は微小な力を合わせ、各々が力を出し合い、長くはかかったが、強制されることなく、自主的に目的に向い、純粋な心で苦悩と闘いながら、遂に目的を達成したのである。

私自身、最近の各大学wvにおける山小屋建設ブームを見聞きするに、結果は同じかもしれないが、その過程では物的な価値感が高まっても、精神的な価値感は何れに等しいと思います。このことは現役の方々も自負していいと思いま

す。

当時OBや関係者の影ながらの応援が、また、温かい励ましが、現役にどれだけ力付けを与えて下さったか。本当に我々は山小屋建設の過程で苦悩の連続だったし、クラブへの疑問も起こしはしたが、その中で我々は友情や励まし、団結力、頑張り等筆舌に言い尽くせぬ思い出や経験を学びました。それが事実山小屋建設に従事した人達の幸福感だったと思います。